

CULTURE

「日本発」

アイデアの文化史

直径5センチはあるだろうか？ 席に座ると、トレーからはみ出しそうなポリリュム感のあるおしぼりが出てきた。

外国人観光客も多く訪れる東京・秋葉原の電気街にほど近い「喫茶室ルノアール秋葉原店」。何しろ外は真冬の寒さ。温かいタオル地で手をふくと、コーヒを飲む前なのに、不思議と落ちついた気分になってくる。

「外国から来た方も驚かれず、普通に使われていますよ」と、アルバイト店員の

「行間」に潜むもてなしの心

杉本由貴(21)。店内を見渡す。気持ち良さそうに顔をふくスーツ姿の中青年男性が目に入ってきた。

客が来たら、まずおしぼりを置く。次に水。提供する順序も同店のマニュアルに明記されている。全国に80以上ある系列店でも基本は同じ。コスト削減を理由に安価な紙製品に切り替える同業者も増えているが、不思議と「廃止論は出てこない」(運営会社「銀座ルノアール」)という。

「厚手で大きなおしぼりにこだわるのは、余裕を持って手や顔をふけるようにしたいから。追加のオーダーが入れば、すぐ2本目を持っていきます」

おしぼりの歴史は古く、東日本おしぼり協同組合理事長の西内毅(46)によると、「古事記」や「源氏物語」にもそれらしい布は出てくるという。原形ができたのは江戸時代。木綿の手ぬぐいが普及すると、各地の旅籠や峠の茶屋には旅人のために水を張ったおけと手ぬぐいが並んだ。客は水に浸した手ぬぐいを絞って、汚れた手足をぬぐうことで旅の疲れを癒やした。この「絞る」行為が、おしぼりの語源だという。

「四季がはっきりして高温多湿な風土だから、おしぼりの爽快感は魅力的。本題に入る前に「ため」を作らたがる日本人の所作にも合っていた」と西内。昭和30~40年代の高度成長期、飲食店の増加に歩調を合わせるように、食前の名脇役として普及していった。

もとは木綿のタオル。それが水の重み



昭和29年に日本航空は着物姿、おしぼり、つちわの機内サービス3点セットを国際線で導入した(日本航空提供)



席に着くと、真っ先に「おしぼり」が出てくる
—東京都千代田区の喫茶室ルノアール秋葉原店

おしぼり ①

おしぼりの歴史は古く、東日本おしぼり

雨も雪もあつたまの
つちわの時代



森村 泰昌

第46話

2011年のファッショントレンドは、リボンなんだぞうである。それも大きなりボンで、真ん中を小さく絞った形状が流行るらしい。

この話を聞いて驚いた。というのも、昨年の後半、私は、岡本太郎作「傷ましき腕」という絵をテーマに作品を制作していたからである。まさにこの絵には、真ん中をキョッと絞った大きなリボンが描かれていた。

岡本太郎と聞いて、人はなにを思い浮かべるだろうか。1970年に大阪の千里で開催された「万博」のシンボルタワー「太陽の塔」の作者として知っている人が一番多いのではないかとと思う。あるいは、岡本太郎その人自身が独特のポーズを取って、「芸術は爆発だ」と語るテレビコマーシャルもよく知られている。岡本太郎は、元気で明るい芸術家の代名詞のように知られているようにである。

「傷ましき腕」も暗い絵だ。顔のない人物が、真夜中、テーブルにうつぶせになっっている。右腕の皮がリソンの皮むきのようにはがれて痛々しい。それなのに頭には大きな赤いリボンがついている。コワイとカワイイが同居した不思議な世界である。

この絵は、パリで1936年に描かれ、その後焼失、1949年に再制作されている。若い時代の作である



「傷ましき腕」のためのリボン 2010年11月

れた全長30センチに及ぶ大壁画「明日の神話」でも、中心に描かれているのは炎上する骸骨である。タローは元気なのではなく、基本は暗い。だがその暗さを後編する光「太陽が、いつも求められている。この希望を見失わない前向きな意志が元気と映じる。

「傷ましき腕」も暗い絵だ。顔のない人物が、真夜中、テーブルにうつぶせになっっている。右腕の皮がリソンの皮むきのようにはがれて痛々しい。それなのに頭には大きな赤いリボンがついている。コワイとカワイイが同居した不思議な世界である。

絵や彫刻を飾る必須の要素となっていく。「太陽の塔」の白い胴体の左右の赤いラインも、私には、ほど暗く怖い色と原色の明るく元気な色のコントラストは、その後繰り返す登場するタローならではの色調である。あるいは、例の大きなリボンであるが、こちらも、形を変えて、タローの腕におけるリボンであると同時に、皮膚を剥がされた痛々しい腕でもあろう。赤い色は、一種フェミニンな色味であり、かつまた皮膚の下にある激しい血の赤でもある。

ところでリボンと言えば、私はもうひとつ別のリボンを思い出す。手塚治虫の「リボンの騎士」である。1928年生まれの手塚治虫も1911年生まれの岡本太郎も、青少年の時

？ チップを払う習慣はないし、恥ずかしがり屋で笑顔も苦手。日本人だから編み出せたもてなしの形だと思っんです」

西内の言う、そんな寡黙なコミュニケーションは、文字通り空を飛び、世界に知れ渡っていく。

日本航空が他社に先駆けて国際線機内で温かいおしぼりを出し始めたのは昭和29年。東京・サンフランシスコ線が最初だ。

日本人の海外旅行が自由化される前から、利用客のほとんどが外国人。米の航空会社の牙城に食い込むには、「日本らしい機内サービスが必要」(日航)だった。これが予想以上に受け、ライバル会社も興味を示してきた。

「各社とも見よう見まねで導入しようとしたのかも知れない。立派な布にオーデコロンを振りかけただけの「おしぼり」をよく見かけました」

日航の社員1期生、佐野開作(81)は当時を振り返る。

いい物だとは思っても、外国人には作り方が分からない。当時の日航の旅客担当者も「現地の方に絞り具合、つまり水を含ませる度合いについて教えるために、太平洋を何度も往復した」(日本航空協会「日本の航空100年」と、折り返し便での苦勞語をつづっている。

日航は同時期、客室乗務員の着用着用品のうちわの提供も始めたが、安全上の問題などを理由にほどなく打ち切っている。おしぼりの提供だけは存続し、半世紀後の現在、外国の航空会社の機内でも見かけるようになった。

西内の言葉を思いだす。

「もてなし(持て成す)とは、ごちそうなどで歓待すること。でも『表裏なし』が語源という説もあるんです」。表も裏もなく接する。英語の「サーブ」には収まりきらない温かみがそこにはある。

敬称略
(海老沢類)

リボンの時代がやってくる

—題字、写真も(美術家)